

2015年6月6日 第三回

門野 泉

はじめに：「ミルワード神父のシェイクスピア物語」第二回の復習と解説

「ミルワード神父のシェイクスピア物語」の第二回を振り返ってみましょう。第一部のご講演では、1954年に日本に始めてお越しになり、上智大学でシェイクスピアをお教えになるまでの期間についてお話し下さいました。

1954年にオックスフォードで英文学の学位取得後、船で40日間かけて横浜に到着され、戦後の傷跡の残る日本に上陸なさいました。横須賀の近くの田浦で日本語を二年間学ばれるかたわら、週に一回上智大学でシェイクスピアを講義なさる日々でいらっしゃいました。1957年からの4年間は、暫時、シェイクスピアから離れ、上石神井の神学校でカトリック神学を学ぶ期間を過ごされました。1960年、聖イグナチオ教会で司祭に叙階され、1962年、上智大学文学部英文科で教育研究の生活をはじめられたのです。

1964年4月23日、シェイクスピア生誕400周年の日に、上智大学での講義録を下敷きにした著書、*An Introduction to Shakespeare's Plays*をまとめられました。この著書は、教え子の安西徹雄先生が日本語に翻訳なさり、『シェイクスピア研究入門』のタイトルで研究社から出版されました。この御本は、その後の龐大な著書出版の始まりとなった記念すべき一冊でございます。

来日以来、多忙な日々のお疲れが出て体調を崩され、1964年、肺結核の可能性が疑われ、“TB or not TB”的状態で入院を余儀なくされました。幸いにも間もなく健康を回復され、翌年、上智大学から一年間研究休暇を与えられ、バーミンガム大学シェイクスピア研究所でシェイクスピアと宗教の研究に取り組まれることとなりました。その成果は、1973年に出版された *Shakespeare's Religious Background*として結実しました。

第二回目のご講演の特徴は、シェイクスピア作品の『リア王』を取り上げられたことでございます。神父様は、『リア王』をシェイクスピア劇のエヴェレストとおっしゃるように偉大な劇、Passion Play(受難劇)として『リア王』をご説明くださいました。『リア王』の名句に触れながら、日本の「わび、さび、もののあわれ」を大切にする日本の風土とシェイクスピア劇を貫く“Nothing”との関連、第四幕は“Happy endings”、第五幕は“Sad endings”で終わる

劇の構造、第五幕の Albany の台詞 “O, see, see!” にグレゴリオ聖歌が響いていること、Cordelia にキリストの姿が投影されていることなど、劇にちりばめられているカトリック的要素を指摘されました。

第二部の対談の部分では、1954 年、遂に日本への布教の願いが実現し、横浜に上陸された際の日本の印象、上智大学の学生の印象、また、島根県浜田で高校生に英語を教えられた時の思い出などにお話し下さいました。

1954 年、神父様が来日の際には船でしたが、時代が変わり、1960 年、叙階式のために英国からお越しになったご両親様は、南回りの飛行機で日本にお越しになりました。叙階式と初ミサのエピソード、参列後、3 週間、日本に滞在されたご両親様の思い出などをご披露くださいました。

最後に、神父様が船上で嵐に遭遇された際に朗誦された『リア王』第三幕の “Blow, winds, and crack your cheeks!...” の台詞を全員で朗読し、散会いたしました。